

【研究メモ】

体験学習としてのインターンシップの可能性と課題

齋藤 百合子

1. はじめに

インターンシップへの関心が、大学生や大学、企業や自治体の間にも拡大している。2013年3月に発表された2011年度の文部科学省の調査によれば単位認定を行う授業科目として実施されているインターンシップ実施大学は、特定の資格取得に関係しないものに限定すれば全体の70.8%に達している⁽¹⁾。さらに就職活動時期繰り下げなどの影響により2015年卒業予定の学生を対象としたインターンシップ実施企業は4124社で前年比の7割増えている⁽²⁾。自治体も、地方自治体や官公庁で学生の夏期休暇や春季休暇に合わせたインターンシッププログラムを実施している。

従来、日本でのインターンシップという言葉は医師を目指す医学研修生に使われてきた。しかし、研修者が理系か文系かを問わずに、現役の学部学生のインターンシップは1997年に当時の文部省、通商産業省、労働省の三省がまとめた「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」⁽³⁾の発表以降である(田中 2010:9)。そこではインターンシップとは「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と説明していた。このインターンシップの理解は、文部科学省が2009年にインターンシップの普及拡大を計るために発表した「インターンシップの導入と運用のための手引き～インターンシップ・レファレンス～」に定義として記されている。文部科学省はさらに大学生に対する就業体験としてのインターンシップ機会を増やすため、学生と中小企業のインターンシップマッチングの中間拠点を

全国13ヶ所に設置する計画も発表している⁽⁴⁾。

このように日本のインターンシップが本格的に政府により推進されてから15年が経過しているが、その間、一般のインターンシップの理解の主流は、インターンシップの定義「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」である。新聞や就職情報検索サイトなどでもインターンシップの説明は、「大学・短大・高等専門学校生らが職業を選ぶ参考にするため、企業や官公庁などで実際の仕事を体験する取り組み」(朝日新聞「キーワード」2010年12月15日)、「気軽に仕事、業界、会社をのぞける」「価値観の異なる社会人、同級生と出会える」「学生生活とは異なる外の世界を体験できる場」⁽⁵⁾と「職業体験」や「就業体験」という理解が強調されている。

たしかに経済界を意識したインターンシップ推進には「職業体験」や「就業体験」を目的とするインターンシップが強調される傾向にあるようだ。2013年に入ってから政財界でも引き続きインターンシップに対する高い関心が伺える。2013年4月19日には経済界との意見交換において総理要請事項のひとつに「キャリア教育やインターンシップへの支援を強化するとともに、中小企業の魅力を学生に発信する取り組みにも力を入れたい」が記された。同じく2013年4月22日には内閣府、文部科学省、厚生労働省、経済産業省が「我が国の人財育成に関する対応方針(大学生等の就職・採用活動問題を中心に)」を発表し、重点的に取り組む事項のひとつに「在学生に対するキャリア教育・就職支援機能の強化」をあげている。「政府は、インターンシップに参加する学生の数の目標

設定を行った上で、大学等教育機関と地域産業界との調整を行う仕組みを構築し、学生に対して、卒業・終了前年度の夏季・春季休暇中に行うインターンシップ、地元企業の研究やマッチングの機会を拡充し、キャリア教育から就職まで一貫して支援する体制を強化する」と、マッチングの機会拡充や支援体制を整える用意があることを記している。

文部科学省と経済界の他に首相および内閣官房長官及び文部科学大臣兼教育再生担当大臣並びに有識者で構成されている教育再生実行会議の第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」⁽⁶⁾ (2013年5月28日)でも、「大学において、学内だけに閉じた教育ではなく、キャリア教育や中長期のインターンシップ、農山村も含めた地域におけるフィールドワーク等の体験型授業の充実を通じて社会との接続を意識した教育を強化する」と、キャリア教育やインターンシップと並んで、経済界だけの実習にとどまらない、農山村を含めたフィールドワークなどの体験型授業の推進にも言及していることは興味深い。

体験型学習方法に対する関心が高まる一方、インターンシップなどの体験型学習は、担当教員の目が届きにくい実習地でのインターンシップに対する批判的な見方も少なくない。経験は個人的なものになりやすく、学習成果として見えにくいという主張である。しかし、都市の経済界だけではなく、農山村を含めた地域を含めた場での体験型学習は、日本社会そのものが直面している少子高齢化や資源エネルギー問題など現代的課題を考える機会を提供できるだろう。

筆者は明治学院大学国際学部でインターンシップ関連科目を担当しているが、最近ではインターンシップを就活を有利に進める目的の「就業体験」を目的に受講する学生が多くなった。グローバルな知識の基盤社会が到来し、学士課程教育の学習成果が問われる中⁽⁷⁾で、大学の学部・学科が単位を認可する科目としてのインターンシップは、学生の「職業体験」や「就業体験」にとどまっていよいのか。農山村でのフィールドワーク等を含む体験型インターンシップで広く、そして深く社

会との接点を探求することも、教育的効果をもたらすのではないだろうか。

インターンシップ実施前の準備授業や、インターンシップ実施中のジャーナル執筆、そしてインターンシップ終了後の振り返りを通して、学習成果を生み出し、そして次なるアクション（改善など）へ向かうための教育的効果を実現する循環的な体験学習（Experiential Learning）の視点が、学習成果を確認するために必要だと考える。

本稿は、インターンシップは体験型学習のひとつとしてとらえている、体験学習モデルを援用しながらインターンシッププログラムの開発を通して、「就業体験」だけにとどまらない深化した学びにつながる可能性と課題を探るための実践の研究メモである。

本稿におけるインターンシップの定義は、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験」ととどまらず、「国内外の農山村も含めた地域におけるフィールド教育型の体験も含めた就業体験も通して、省察（ふりかえり、リフレクション）を行い、自己分析と他者理解、社会の理解を促しながら、学びを深めること」とする。その上で、まず米国のインターンシップが、コア教育やサービスマーケティングという体験的な学習手法に分岐していった経緯を概観する。

次に体験学習理論におけるインターンシップの位置と体験学習モデルで活用されるふりかえりについて考察する。

そして次に、国際学部国際学科のインターンシップを事例として体験学習手法による実践をとりあげ、体験学習としてのインターンシップの可能性と課題を提示する。

なお、本文は明治学院大学国際学部附属研究所共同研究「インターンシップの運用および学習成果に関する研究」（2013～2014年度、研究代表者吉井淳、櫻井結花国際学部附属研究所研究員）に基づく研究成果の一部である。ただし本論文の文責は齋藤にある。

2. 米国のインターンシップの経緯：試行錯誤の体験的学習の軌跡

米国のインターンシップ発祥は、20世紀初頭の1906年シンシナティ大学のハーマン・シュナイダー学長の「理論と実践の反復が教育の質を高める」との理念の下で開発、開始されたプログラムであり、その内容は、数週間のフィールドワークに近いものだった（加藤 2006:74, 9）⁽⁸⁾。米国におけるインターンシップは、1960年代くらいまで就業体験を含む実践的教育として主に工学系大学で取り入れられてきたが、1970年に入ると短期・無報酬を原則とするインターンシップと、中長期・報酬を原則とするコーオプ教育との区別化が進行した（加藤 2006:74）。インターンシップの定義は、「在学中のフルタイムの学生に対し、彼ら彼女らの学問やキャリアへの関心と関連深い仕事に就ける制度化されたプログラム」⁽⁹⁾で、コーオプ教育は「特定の専門職の分野と関連付けられている選考分野で、既に相当な準備（所定の単位取得等）をした学生に、カリキュラムの仕上げとして行われる一回限りの仕事もしくはサービスの経験」（加藤 2006:74, 就職協定協議会特別委員会 1997）である。

インターンシップとコーオプ教育が別れた背景には1960年代の初等から高等教育での学力低下と、1967年2月に発表された教育教書には「学期ごとに勉学と就業を相互に行い大学の卒業資格を取得できる産学協同プログラムの拡充と補助金交付がなされ、翌1968年には米国高等教育法が改正された。この結果、1968年から1982年に至る15年間、連邦政府からコーオプ教育に対して1大学当たり7.5万ドルを上限とする補助金が支給され、コーオプ教育の普及、発展に大きく貢献した（加藤 前掲）。

アメリカの1960年代後半から1970年代前半は、公民権運動やベトナム反戦運動を契機としてさまざまな社会的問題が国家的な関心事になりえた時代だった。社会参加をひとつの切り口として研究する公民教育を唐木は、参加民主主義という「参

加」の視点がこの1960年代後半から1970年代前半に醸成され、1970年代の公民教育の議論に結びついたと述べる（唐木 2010:63）。そして「反省的インターンシップ・モデル」を構築し、サービス・ラーニングとして発展した、とインターンシップとサービス・ラーニングが分岐したことを指摘する（唐木 前掲, 44）。

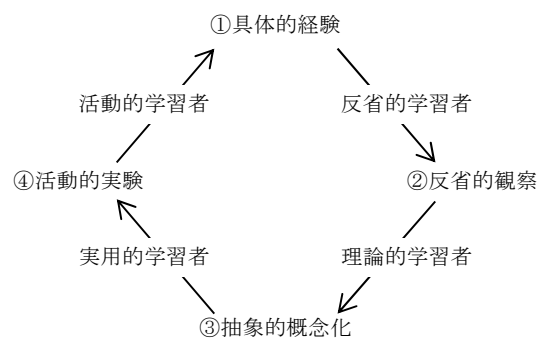
3. 体験学習としてのインターンシップ

(1) 体験学習モデル

経験から省察的な学びを行う、という体験学習の理論の原点は教育学者のデューイ⁽¹⁰⁾に見ることができる。その流れを汲んだコルブが体験学習（Experiential Learning）モデルとして発展させてきた（Giles and Eyer 1994）。コルブは、学び（Learning）とは、成果ではなく気づきのプロセスであり、体験や経験に基づいてそのプロセスが継続していくことであるとする（Kolb 1984:26-30）。体験や経験から気づき、その学びを深めていくプロセスは、コルブの体験学習モデルと呼ばれている。その内容は次のプロセスである。

まず、具体的な体験（Concrete Experience）を通して「感じる」、内省的な観察、つまりふりかえり（Reflective Observation）を行って「観察し」、そこから抽象的な概念化、一般化（Abstract Conceptualization）の作業で「考え」た後、さらに新たに積極的に体験「行動する」をする（Active Experimentation）を行う（Kolb 1984:21, 唐木 2010:

図表1 経験学習のサイクル



唐木 2010より

210)。

大学キャンパスから出て課外活動で「経験」から学びを促進する、という経験学習の教育手法について、サービ斯拉ーニングや経験学習に造詣が深い研究者のファーコは、サービ斯拉ーニングと他の「活動やサービスなどを通じた経験から学ぶ活動」、たとえばボランティア、フィールド教育、インターンシッププログラムなどを排除するべきではないと論じている (Furco 1996:3)。つまり、これらの課外活動はファーコによればすべてが体験学習だが、これらの経験は誰にとって有益なのか、また何を焦点にするのか、によって図表 2 のサービスを提供するプログラムの違いになる。

つまり、大学の教育活動として教室の外で行われる活動における体験や経験は、それがサービ斯拉ーニングやコミュニティサービス、フィールド教育やボランティアそしてインターンシップなど名称やプログラムの内容に違いはあるが、体験を通じた学習のプロセスとしてとらえることができる。アメリカ合衆国には、全米 1100 の大学の 600 万人の学生を代表する学長らによって構成される「キャンパス・コンパクト」があり、サービ斯拉ーニングとして学生を地域社会に送っている。キャンパス・コンパクトも、インターンシップの経験はサービ斯拉ーニングと同様かそれ以上のインパクトを与えていると記している⁽¹¹⁾。

しかし、インターンシップが体験学習として学

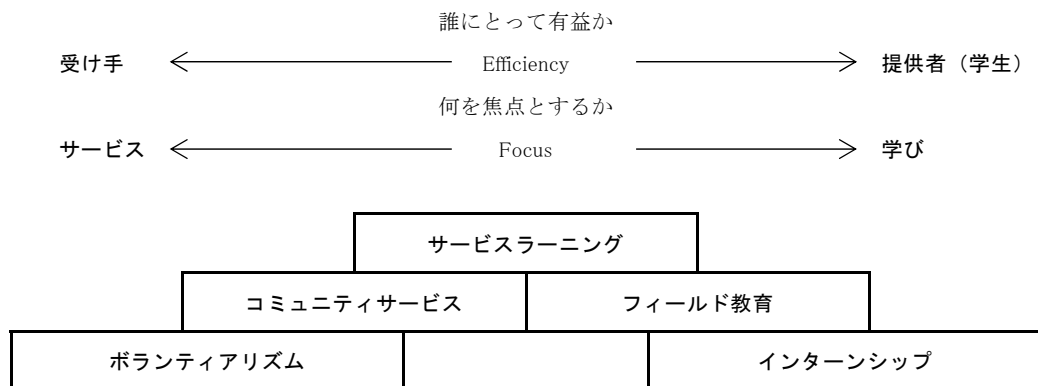
習プログラムの一形態としてとらえることができるという理解は、日本にインターンシップが導入されたときには稀薄だった。日本におけるインターンシップを体験学習としてとらえることの意義と可能性を、元法政大学総長の清成の言葉に代えたい。

「米国の体験教育 (experiential education) の一累計とされるインターンシップという用語はわが国に不用意に導入されたが、1998 年の初め頃から急速に普及しつつある。しかし現実において体験教育はきわめて多様であり、アメリカにおいてインターンシップはその一累計に過ぎない。わが国において体験学習をインターンシップという表現で一括するにはかなり無理がある。一中略一体験学習の目的は、大学からみれば、あくまで教育のレベルアップになる。その効果としては、学生が的確な勤労感・職業観を自らもてるようになるとともに専門能力の向上が期待できる。学生が主体的に職業を選択し、キャリア形成を進めるという欲求が作りだされれば、自立的人財を求める企業等にとっても望ましいはずである」(清成 1998)。

(2) 体験を通じた「ふりかえり」

体験学習モデルを実践するには、つねに行動と「ふりかえり」もしくは「省察」「内省的な考察」「リフレクション」と呼ばれる、経験と思考の反復作業が重要である。体験して「よかった」、「お

図表 2 サービスを提供するプログラムの違い



Furco の図を筆者が翻訳して作成

もしろかった」、「役にたった」、「勉強になった」という漠然とした感想や、一時的な刺激や精神的な高揚だけはふりかえりにならない。具体的に何がどのようによくなったのか、なぜそのように考えたのか、何に強い印象を抱いたのか、それはなぜか、他の事象と比べてみるとどうなのか、体験を通して足りなかったこと、失敗したことから何を教訓として次につなげるか、大学で学ぶ他の教科や論文執筆のヒントなどさらなる学びは継続されるのか、それらの学びを通してどのようなキャリア形成をしていくか、など、つねに「ふりかえり」、それを言語化していくことで経験から学びへの内実化が促進されるであろう。

では、「ふりかえり」とは何をするのか。唐木はアメリカの教育学者アイラーが記した「サービス・ラーニングにおけるリフレクションのための実践者ガイド (1996)」から、リフレクションは4つのCという言葉で表現できる。4つのCとは、「継続的 (Continuous)」になされ、学問的な技能や知識と「関連的 (Connected)」であり、学習者の考え方や仮説を「吟味する (Challenging)」であり、さらに適切な時に適切なリフレクションが必要という意味で、「文脈に当て嵌められた (Contextualized)」でなければならない、としている (唐木 2010:208)。さらに、唐木は経験学習としてのサービスラーニングのリフレクションを「読む」「書く」「為す」「話す」の4つの方法と、6つの学習成果 (個人的な発達、他者との結びつき、シティズンシップの発達、理解、適用、新たな枠組みを構成すること) に分けて「構造化し、教師 (実践者) が学習者に質問したり、具体的な成果物からリフレクションが実践できるようリフレクション・マトリックスを開発した。図表 5 は唐木のマトリックスを活用して作成したリフレクション・マトリックスである。

また、和栗は、「ふりかえり」という言葉を次のように紹介しながら、体験・経験を行った学習者に対して3つのWhat (何) による質問群を活用した方法でリフレクションを実践している。

効果的な体験的な学習プログラムには欠かせない「ふりかえり」体験を一過性の刺激にとどめるので

はなく、体験を紐解き、整理し、次の行動へつなげていくための大切な作業です。(中略)

体験的な学習における一般的な「ふりかえり (Reflection)」とは、したこと、起こったこと、そしてそれに対する自身や他者の反応とそれらが与える影響等をふりかえることを指します (和栗 2008: 50)。

3つのWhat とは、まず「何をしたのか?何を学んだのか?」のWhat, 次に「それはどのような意味があるのか、なぜ重要なのか、どのように感じるのか」というSo What (だから、何?), そして「学んだことをもって、次に何をどうするか、この学びは次にどのように活かすことができるのか」というNow What (ゆえに、何?) と、ひとつの応答からどんどんと内省化させる質問群である。

体験的な学習としてインターンシップを捉えるならば、経験を内実化して学びや深い理解を促すためには、こうしたふりかえりのプロセスを積極的に取り入れるべきだろう。

4. 明治学院大学国際学部のインターンシッププログラム

次に、事例として、明治学院大学国際学部国際学科のインターンシッププログラムを取り上げる。

明治学院大学国際学部国際学科の「インターンシップ」科目は通年科目で、「インターンシップA」(インターンシップ実習時間150時間以上6単位)および「インターンシップB」(インターンシップ実習時間100時間以上4単位)の2科目があるが、同じ時間にふたつの科目を同時に行う。受講生によっては、インターンシップ実習時間数の関係で、「インターンシップA」を「インターンシップB」に変更したり、その逆の希望もあり、秋学期開始前に一度だけ履修変更の機会を与えている。これらの「インターンシップ」科目は、春学期のインターンシップに備えた事前学習と、インターンシップ実習 (多くの学生が夏期休暇中に実施す

体験学習としてのインターンシップの可能性と課題

る),そして秋学期にふりかえりなどの事後学習を行う通年の構成である。明治学院大学国際学部には国際学科と国際キャリア学科⁽¹²⁾の2学科があり,どちらの学科もインターンシップ科目を開講しているが,本稿は国際学科のインターンシップ科目とその受講生について言及し,体験学習としてのインターンシップモデルの可能性と課題を考察する。

(1) 受講生とインターンシップのマッチング

2013年度の「インターンシップA」受講学生は22人,「インターンシップB」受講学生は21人,合計43名が履修登録している。受講者は主に2年生と3年生で,主に次の4つのインターンシップに関する情報源からインターンシップ先を選択した⁽¹³⁾。

① 学部提携型

国際学部が独自に開拓し提携している機関企業,団体など,学部がインターンシップの提携をしている機関でのインターンシップに参加する形態。

国外では,オーストラリア,ヴィクトリア

州メルボルンにおける5か月間(4月~9月)の日本語教師ティーチングアシスタントプログラムや,シンガポールとマレーシアの人材派遣企業における有給のビジネスインターンシッププログラム(3月~8月)の長期インターンシップのほか,香港の日系企業における4週間(8月)のビジネスインターンプログラムも提供した。さらに2013年度は新たに大学のプログラムである国連ユースボランティアプログラム6か月(9月~翌年3月)もインターンシッププログラムと認定した。国内は,明治学院大学国際学部が立地する神奈川県内の横浜YMCA,UN WOMENよこはま,徳島県の山村の地域づくりのZIVASANプロジェクトなどを学生に紹介した。

② キャリアセンター経由型

大学内のキャリアセンターを経由してインターンシップの機会を得る。キャリアセンターでは,企業のほか,地方自治体や官公庁などのインターンシップ情報も提供している。

図表3 2013年度「インターンシップ」マッチング4類型

① 国際学部提携型	海外(5ヶ月間)	オーストラリア	日本語教師ティーチングアシスタント
	海外(6ヶ月間)	シンガポール, マレーシア	一般企業でのビジネスインターン
	海外(6ヶ月)	ケニア	国連ユースボランティアプログラム (このプログラムのみ大学提携)
	海外(4週間)	香港	教育事業社でのビジネスインターン
	国内(神奈川県)	横浜YMCA, UN WOMEN よこはま	
	国内(徳島)	ZIVASAN プロジェクト 山間地における地域おこし	
② キャリアセンター経由型	国内	企業(航空運輸業,化粧品業界),地方自治体など	
③ 業者委託型	海外	ニュージーランド 旅行代理店でのインターンシップ	
④ 自己開拓型	海外	タイ	北部タイ山岳民族支援のNGOでの教育支援
		カンボジア	現地小学校での教育支援
		インドネシア	現地の小学校での教育支援
	国内	旅行・ホテル関連企業,ベンチャー企業,NPO,民間団体など	

図表 4 2013 年度「インターンシップ A」「インターンシップ B」のスケジュール

4月	オリエンテーション, 自己分析, インターンプログラム紹介	春学期
5月	体験学習の実習 (1日), 学部内インターンシッププログラム参加者の選考, SWOT 分析による自己分析 外部講師による講義 (「マイナビ」社) (1回)	事前準備
6月	「働く」ことを考える書籍の読書 1day for others (一日ボランティア/インターン体験) 参加 インターンシップマッチング, 受け入れ先が決まった人からインターンシップ先の事前研究とプレゼンテーション 図書館データベース「日経テレコン」講習会実施 (1回)	↓
7月	インターンシップマッチング, 受け入れ先が決まった人からインターンシップ先の事前研究とプレゼンテーション	
8月	夏期休暇 (インターンシップ実施)	夏期休暇
9月	ふりかえりのグループディスカッション (小グループ化)	ふりかえり
10月	インターンシップ第1次レポート提出, ピアレビュー	↓
11月	ケースメソッドで学ぶ	
12月	インターンシップ最終レポート提出, 次年度学生への広報	
1月	インターンシップレポート集作成, 次年度学生への広報	

③ インターンシップ斡旋業者委託型

インターンシッププログラムを紹介・斡旋する業者によるプログラムへの参加。国外での企業インターン、ボランティアプログラムのインターンなどに参加したり、国内で長期インターンに参加した学生もいた。

④ 自己開拓型

学生が独自にインターンシップ検索サイトで探したり、大学の授業やイベントなどで知り合った団体や企業に自ら志願してインターンシップを実施した自己開拓型インターンシップである。

行先も機関もインターンシップの形態もばらばらで個別対応になりがちであるが、インターンシップ実習先が決定した学生は、参加届誓約書、健康状態申告書を学部事務室に提出し、教員とともに緊急時に備える。国内で実施されるインターンシップに参加する学生は、インターンシップ賠償保険への加入を必須とし、国外のプログラムに参加する学生にはパスポートの写し、フライトスケジュール、海外旅行傷害保険の証書コピーも同時に提出を求めている。

また、学生の派遣先企業や団体とは、インターンシップに関する合意書を取り交わし、終了時の評価を書面で依頼している。

(2) 体験のふりかえりを促すための授業の工夫

2013年度の「インターンシップ」科目は、以下の内容とスケジュールで行った。春学期はインターンシップの準備段階として、SWOT分析を通じた自己分析や、「働く」ことを考える読書、大学図書館に設置している日本経済新聞社関連データベースの日経テレコンの活用法などを専門インストラクターから受講して情報技術のスキルを向上させ、インターンシップ先の業界研究や社会動向などの調査研究が可能となる環境を整備した。

さらに、学内ボランティアセンターが6月に実施した1day for others プログラム⁽¹⁴⁾の一日ボランティアやインターンを通して体験の学習的ふりかえりを促すレポートを課した。日常的な体験や経験を、読むこと、書くこと、話すことなど小さな循環で振り返り、それらを繰り返すことと、自己分析、情報リタレシー、調査研究スキルなどは、インターンシップという学外での経験を、より学

図表5 「インターンシップ」科目のふりかえりの作業

	読む (Reading)	書く (Writing)	為す (Doing)	話す (Telling)
個人的な発達	「働くことについて」文献読書	小レポートを作成する		小グループでシェアする
	一日ボランティア, インターン (One Day for Others)の経験から学びについて考える	一日ボランティア, インターン (One Day for Others)の事後レポート	レポート提出	
	自己分析についての配布資料を読む	分析結果を客観的に書く	自己分析・SWOT分析	小グループ内でのシェア
	インターンシップ情報を読む, 得る 図書館ガイダンス「日経テレコン活用法」	エントリーシートを書いてみる	応募する	選考面談を体験する ガイダンスに参加する
シティズンシップの発達 (社会人としての態度の発達)	(メールを含む) ビジネスマナーに関する記事等を読む	コメントペーパーを書く	学生・教員間, 学生間で実践する	マナーが不十分な時など指摘しあう
	健康管理, (セクハラを含む) 危機管理に関する資料を読む	学び得た, 知り得たことをコメントペーパーに書く	場面を想定した対応を考える	健康管理, 危機管理に関する意見を交わす。
インターンシップの理解	関心のある業界, 企業等の情報を調べ, 読む	個人のジャーナル	データ収集, 事前研究	事前研究の発表を授業内で行う/質疑等を受ける
	インターンシップ派遣先の事前研究	個人のジャーナル期待, 疑問, 課題などを書く	発表原稿を作成する	
インターンシップ実施中		ウィークリージャーナルを書く	インターンシップ・スーパーバイザーに確認してもらう インターンシップ終了後, 担当教員に提出	
インターンシップ実施後 (秋学期)		終了届を提出する。インターンシップ中にヒヤリハットや問題が生じた場合は記載する		夏季休暇中に実践したインターンシップの体験を話す, 共有する
		インターンシップの経験, 学んだことをまとめる	インターンシップの経験を振り返る (小グループ内)	授業内でインターンシップ報告を行う
	ケースメソッドの方法論を読む	インターンシップ中の経験をケーススタディとして書き起こす	ケース執筆者がファシリテーターとなり, 個々のケースや対応法をグループ内で実施する	
新たな枠組みの構成 (さらなる行動)	小グループ内の他者のインターンシップレポートを読む	レポートに感想, 修正点等のコメントを書く	ピアレビューを小グループ内で行う (さらに質を向上させた最終レポートを執筆する)	
		インターンシップ事後調査で, インターンシップ後に改善したいことを書く	小グループ内でインターンシップ後の発展の形について話し合う (個人, グループ, 同プログラム参加者, 受け入れ先のイニシアチブなどにより, 新たな行動が発生する) 学内のボランティアチャレンジ基金の助成に申請して助成金を獲得し, インターンその後の報告や展示会, ワークショップなどの次なるアクションにつなげることができた。	

唐木 2010 のリフレクションのマトリックスを参考に, 齋藤が作成

習成果を高めるための機能を果たすと考えている。

さらにインターンシップ実習中は、ジャーナル（日誌もしくは週誌）を執筆することを促し、経験や体験を記録する。

そして、インターンシップでの経験をした後には、固定化した小グループを形成して、グループ内でのピアサポート、ピアラーニングができるよう工夫した。インターンシップで体験したことをグループ内でまず語り合う。その後、インターンシップレポート第1稿を書き上げたときにはグループ内でピアレビューを実施した。また、インターンシップ中の失敗談や疑問を自分のケース（事例）として執筆し、他の人々はどのように考えて、どのような態度をとるかなどを議論するケースメソッドを活用したディスカッションを進めた。

こうした反省的、反復的なふりかえりを小集団で行うことにより、自らの経験の相対化を促した。ケースメソッドやピアレビューなどグループディスカッションを繰り返した後、グループ毎にインターンシッププレゼンテーションを、機器のセッティング、司会、時間管理などをグループ毎に担って実施した。

上記のように、「インターンシップ」授業内で実施するふりかえりは、「読む」、「書く」、「為す」、「話す」ことをふりかえり（リフレクション）の重要な要素と考える唐木（2010）のリフレクションマトリックスを援用すると、図表5のように表

すことができる。

(3) 事例研究

上記で見てきたように、インターンシップの体験だけでなく、インターンシップの授業での小さな体験や経験のふりかえりを通して、体験学習としてのインターンシップの質の向上をめざしてきた。しかし、体験学習として学びを循環させて質の向上を図るためには、唐木の経験学習モデルを援用するならば、①具体的体験を、②反省的に観察し、③抽象的概念化の次に、④活動的実験が期待される。学生の個人的なふりかえりであれば、④の活動的実験、つまり次なるアクションは、「関心のある業界を知りたい」、「他の業界・業種も知りたい」、「視野を広げたい」ために「違う業種でさらなるインターンシップを実践したい」などが、インターンシップ終了学生を対象に実施したアンケートでも散見されており、学生個人レベルでは循環的なふりかえりが部分的にでも実践できていると言えるだろう。

しかしここでは科目（プログラム）としての「インターンシップ」について考察したい。

「インターンシップ」クラス受講生のインターンシップマッチングには4類型あると前述しているが、その4類型にはそれぞれ以下のようなメリットとデメリットが散見できる。

本節では、①学部提携型のふたつのプログラム、香港でビジネスを展開するパーソナエデュケーショ

図表6 インターンシップ派遣型別のメリットとデメリット

	メリット	デメリット
① 学部提携型	担当者間関係良好。プログラム質の向上リスク管理に寄与。学生の人気も高い。	個別対応のため手間がかかる。事務方の支援必須。
② キャリアセンター経由型	事務手続きが簡略化できる。 インターン先の選択肢多数。 学部とキャリアセンターの関係強化。	インターン実施期間が短い。 国内英語環境プログラムがない。 海外インターン情報がない。
③ 業者委託型	インターン先の選択肢多数。 業者を通したリスク管理。	料金が高くなる。 プログラム内容向上に関与できない。
④ 自己開拓型	親のコネクションなどを活用してインターンシップ先の確保や、知合の紹介、一般募集選考合格	受入側にインターンシップの意識希薄のためプログラムより無給アルバイト的。学生満足度低い。お客様扱い。

図表 7 香港のビジネスインターンシッププログラムと徳島の山間地でのインターンシッププログラム

	Pasona Education Co., Ltd. Hongkong	イコールラボ ZIVASAN
場所	中国・香港特別行政区	徳島県木頭
期間	4週間（150時間相当）	約15日間（100時間相当）
業務内容	コンサルテーション、営業同行、日本語ティーチングアシスタントなど	フィールドリサーチの後、地域の課題解決方を企画
参加学生数（延べ）	10名	9名

ン香港社でのビジネスインターンシップと、徳島県木頭という山間地における地域での一般社団法人イコールラボが実施する ZIVASAN プロジェクトにおけるフィールドワーク的インターンシップを事例として取り上げる。両プログラムとも、筆者が新規開拓して 2011 年から学生を複数名派遣しているインターンシッププログラムである。

ふたつのインターンシッププログラムに共通していることは、受け入れ先に明確な担当者が存在し、学生のインターン中の様子や評価を担当者から聞くことができること、学生の非常時には即座に対応していただき、インターンシップ責任者にも連絡していただけること、そしてプログラム終了後と開始前に担当者同士のふりかえりと次年度に向けた改善策を相談しながら策定していけることである。

Pasona Education Co., Ltd. Hongkong は本社が東京にあるため、出発前オリエンテーションを東京本社で実施していただき、服装やビジネスマナーなどの講習をしていただいたり、インターンシップ終了後の学生のプレゼンテーションにもコメントをくださる。学生のニーズや社会のニーズに合わせたよりよいプログラムの改善を話し合える関係にあるため、3 年間で香港でのフードフェアなど国際見本市にインターン生を配置させるなど充実したプログラムを構築している。

徳島県の山間地にあり、林業とゆずが特産の木頭のプログラムでは、中心となる担当者によって地域のさまざまな人や仕事、そして課題を前半で学び、後半で課題解決型のリサーチと企画、そしてプレゼンテーションを地域住民の前で行う短期集中型のプログラムである。学生の中には外国に

行くよりも、山間地の少子高齢化社会に異文化の衝撃を受ける者も多く刺激的だが、プログラム終了後に企画実践が途切れてしまうことが課題だった。しかし、2013 年度にこのプログラムに参加した 3 人の学生は、「木頭の良さを知らせる」企画を立案し、学内のボランティアチャレンジ基金⁽¹⁵⁾に応募して助成金を獲得した。この企画で、木頭でゆずの加工品等の製造販売で企業した女性グループの起業家や、木頭出身で横浜で広告代理店を営み、木頭の木材活用を考えている方らを招き、ゆずを活用したワークショップを実践した。ワークショップ実施時はスカイプで、木頭の方々とも交信できた。まさにインターンシップでの学生の経験が、ふりかえる過程で、さらなる行動につながったことを実感したイベントであった。



木頭のゆずワークショップ（明治学院大学にて）

5. まとめ

香港のビジネスインターンシップや徳島県木頭

でのフィールドワーク型インターンシッププログラムを見ると、インターンシップが「就業体験」と一口では表せない深みを感じる。まさに、ファークが表現したインターンシップ、フィールドワーク、サービスマーケティング、コミュニティサービスなど、インターンシップを体験学習ととらえ、学生の学びを深める可能性をもつ。

しかし課題もある。学生が体験するインターンシップ先が多岐に、また広範囲であるため、ひとつひとつのインターンシップ先とよい関係構築を構築していくための人的なキャパシティが限定されていることである。また学生のふりかえりを2013年度はグループワーク中心に実施してきたが、個別のふりかえりが必要だった場面もあったのではないかと省察する。さらに、インターンシップ先のインターンプログラム如何によって、低額もしくは無償労働ではないかと疑いたくなるプログラムも存在しているため、インターンシップマッチングの際の分析や注意がより必要になることである。

今後は、こうした課題の克服に尽力しつつ、学生の学びを深めるためのリフレクションの工夫と、学びを得た学生に対する評価、また受け入れ先との関係性の向上など、さらに実践の工夫をしていきたい。

注

- (1) 平成 25 年度「大学等における平成 23 年度のインターンシップ実施状況」調査より
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/055/gijiroku/_icsFiles/afiedfile/2013/07/12/1337777_1.pdf (2013 年 10 月 30 日アクセス)
- (2) 就職情報サービスのマイナビ社, 三上隆次編集長のインタビュー記事「増える就業体験」より日本経済新聞 2013 年 9 月 2 日付
- (3) 「インターンシップ推進に当たっての基本的考え方」
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002b9xq-att/2r9852000002ba3w.pdf>(2013 年 10 月 30 日アクセス)
- (4) 「就業体験, 学生もっと, インターンシップ拠点全国 13 ヶ所設置へ」日本経済新聞 2013 年 9 月 21 日付
- (5) リクナビ「インターンシップで仕事研究しよう！」「インターンシップとは」
<http://job.rikunabi.com/2014/contents/article/>

- edit`intern`index/u/ (2013 年 10 月 30 日アクセス)
- (6) 首相官邸 教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について」(第三次提言)
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikukusaisei/pdf/dai3_1.pdf (2014 年 1 月 14 日アクセス)
 - (7) 文部科学省 2008 年「学士課程教育の構築に向けて(答申)」p8
 - (8) しかし米国では、インターンシップを「普及型インターンシップ Internship」と発展型インターンシップとしての「コーオペ教育 Cooperation Education」の 2 種類に分けて捉えられており、コーオペ教育の発祥が 1906 年シンシナティ大学とする田中論文もある(田中 2013:10)。
 - (9) 米国のインターンシップの定義は、1997 年に当時の文部省、通商産業省、労働省の三省がまとめた「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」の「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」とよく似ており、米国の動向は日本のインターンシップ導入期のインターンシップの概念化に影響を与えたと言えるだろう。
 - (10) 教育学者デューイは 1916 年の著でふりかえりとの表現をせずに、民主主義と教育の文脈で学習者の主体的、内省的な学習の必要性を記している。
 - (11) Campus Compact, Service Internship
http://www.compact.org/initiatives/syllabi/syllabi-introduction-page-3/service-internships/?zoom_highlight=internship (2014 年 1 月 14 日アクセス)
 - (12) 国際キャリア学科は 2011 年に新設された学科で、すべての授業が英語科目である。インターンシップ関連科目は、セメスター毎に設定され、「Internship A」(インターンシップ実習時間 150 時間以上 6 単位)、「Internship B」(インターンシップ実習時間 100 時間以上 4 単位)の 2 科目がある。
 - (13) 多くの場合、学生が希望する企業、団体、機関にエントリーシートという志望動機や自己アピールなどを記した応募用紙を送付した後、書類審査、面接選考がある。
 - (14) 明治学院大学ボランティアセンターが毎年 6 月に 1 日のみ実施するボランティアやインターンシップを提供するプログラム。
 - (15) ボランティアセンターが毎年一回新たにボランティア(社会貢献活動を含む)を実践しようとするグループの企画を審査し、最大 10 万円の助成金を与える事業。

<参考文献>

- Dewey, John (1916) "Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education", New York: Free Press.
(=1975, 松野安男訳, 『民主主義と教育(上)』, 岩波書店)
- Furco, Andrew (1996) "Service-Learning- A Balanced Approach

体験学習としてのインターンシップの可能性と課題

- to Experiential Education” “Expanding Boundaries: Service and Learning” *Corporation for National Service, Learn and Serve America: Higher Education Cooperative Education Association*
- Giles, Dwight E and Eyler, Janet (1994) “Theoretical Roots of Service-Learning in John Dewey: Toward a Theory of Service-Learning” *Michigan Journal of Community Service Learning* Vol.1, No.1
- Kolb, David (1984) “Experiential Learning Experience as the source of Learning and Development”
<http://academic.regis.edu/ed205/Kolb.pdf> (2013年12月2日アクセス)
- 唐木清志 (2010) 「アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング」 東信堂
- 経済産業省, 特定非営利活動法人エティック (2013) 平成24年度産業経済研究委託事業「産学連携によるインターンシップのあり方に関する調査報告書」
- 田中宣秀 (2010) 「インターンシップの原点に関する一考察—実験・実習・実技科目のキャリア教育・大学改革における意義—」『生涯学習・キャリア教育研究』第6号 名古屋大学教育学部・教育発達学科学研究科紀要
- 文部省, 通商産業省, 労働省 (1997) 「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」
- 文部科学省 (2009) 「インターンシップの導入と運用のための手引き～インターンシップ・レファレンス～」
- 文部科学省 (2013) 「大学等における平成23年度インターンシップ実施状況調査について」
- 和栗百恵 (2008) 「「ふりかえり」とは？」『体験的な学習とサービスラーニング』早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)